

安田女子大学紀要 40, 215-223 2012.

書道の学習方法と思考活動との関係

——楷書古典を中心に——

谷 口 邦 彦

A Study of the Relationship between Thinking and Method for Learning Calligraphy
with Special Reference to Classical Chinese Characters

Kunihiko TANIGUCHI

はじめに

書写書道における学習者研究の分野は、その必要性が言われながらも未だ教育研究に位置付いていない。まして、書道の分野においては皆無の状況にある。書道の学習は表現の学習を中心に展開されていくのが一般的だが、学習者の態度や制作された作品のみから学習者を捉えるのではなく、思考活動や認知活動、さらに運動能力も含めた把握が必要と考える。本発表は、他の分野での知見を参考にしながら、楷書古典を用いた書道における学習（指導）方法と思考活動、認知活動との関係について試案を提示しようとするものである。

問題意識としてあるものは、学習者の、一般的には「自己学習力」と言われるものの欠如である。文字を書くことの学習は、手指の運動のみならず、「筆跡は脳跡」と言われるように脳の働きと密接な関係にあることが明らかになってきた。この自己学習力を働かせる原動力となるのは、思考や認知といった脳の働きによるところが大きいと考える。

1. 書道の学習活動

(1) 書道の学習活動の分類

表現、鑑賞、理論に分類されてきた。高等学校学習指導要領では表現、鑑賞からなっている。表現には臨書と創作があり、さらに、表現と鑑賞は表裏一体の関係にある。その側面から理論が支えるという関係にある¹⁾。

(2) 書道の学習形態

書道の学習は、学校などの教育機関のみで行われるのではなく、私塾、公民館やカルチャーセンター、グループまたは個人と様々である。学習の場が異なってもこの3つの領域を学習することに変わりはない。さらに、指導者と学習者という関係についても、後述する個人内での学習活動が行われるならば、必ずしも指導者が必要というわけでもない。

1) 久米 公『書写書道教育要説』p251～252

(3) 書道の学習活動の基本的な過程

この3つの領域について、どのように学習活動が展開されていくのかについては、個人、指導者、場所、立場による違い、またどのような学習段階なのかによる違いによって様々である。久米は学習の基本構造として図1のように整理した²⁾。「立場や観点によって異論のあることも予想される」と断っているが、教育現場で行われる基本的な学習構造を示している。

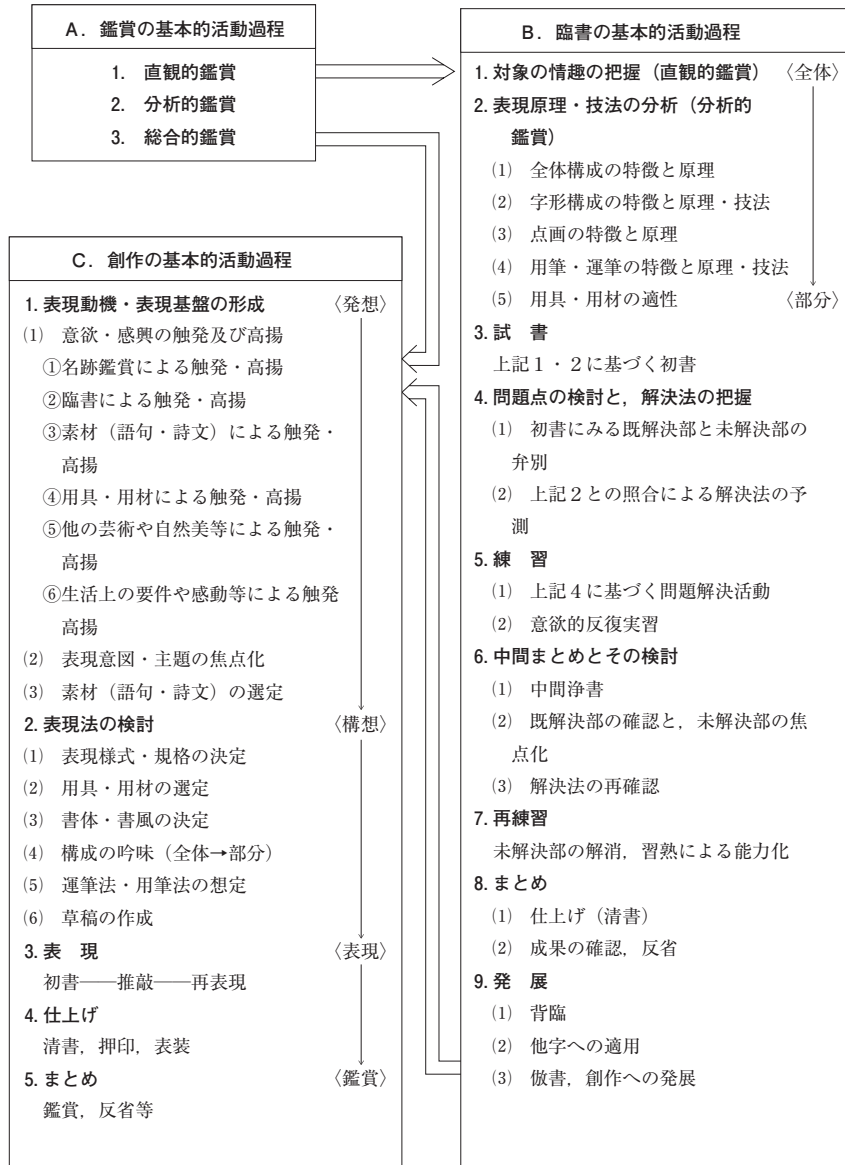


図1 鑑賞、臨書、創作の基本的活動過程と、相互の関係 (久米1989)

2) 前掲書 p253

(4) 書道の学習活動と思考・認知

例えばこの基本構造の具体的な学習活動に付随して、「分析」「弁別」「予測」「把握」「解決」「焦点化」「反省」「適用」「発展」等の文言が見える。これらがまさに思考活動、認知活動そのものである。従前から学習の基本構造に組み込まれている思考活動、認知活動であるが、学習者一人一人の把握が行われてきているわけではなかった。

2. 思考活動と認知活動

(1) 書道の技能の整理

書道の技能については、手指で筆等を使うことから、運動面中心の技能と考えられている。従来から行われている例えば、指導者が書いて見せ、その動きを真似るような指導法。極めてシンプルなこの指導法においても、学習者は指導者の筆の動きを把握し、自らの動きと比較し、自らができていない動きを整理する。そして、練習へとつなげていく。さらに、別の文字へと応用していく。といった活動を学習者自らが展開できなければ技能として身につけていけない。

つまり、思考活動や認知活動は、書道でこれまで行われてきた指導の中も見出すことができるのであるが、指導者にも学習者にもその効果や必要性が整理把握できていないことが問題としてあったように思われる。従って、書道の技能は、頭中の脳の動きである思考・認知から手指の運動に至る一連の活動と捉え、運動面のみならず思考面、認知面をも関連させて考えていく必要がある。

(2) 心理学における思考研究

市川³⁾は「思考」を「一般には、ある状況にたいして反射的に反応するのではなく、複雑な内的過程を経て判断や行動が行われることをさしている。思考には、推論、問題解決、理解、概念形成などの機能が含まれる」と述べている。思考は第三者の目で捉えられ、その特性を明らかにしようと試みられてきたが、1970年代以降、自己の思考傾向についてどの程度正しい知識を持っているか、思考という認知活動そのものを認知の対象としようとする「メタ認知」という動きが出て来る。

(3) メタ認知の概念

三宮⁴⁾は、メタ認知について次のように定義づけている。「概念規定の問題には、まだ不明確な部分も残っている。しかし、メタ認知が「認知についての知識」といった知識的側面と、「認知のプロセスや状態のモニタリングおよびコントロール」といった活動的側面とに大きく分けられるという点では、研究者間でほぼ一致をみる」と述べている。また、「自分あるいは他者に固有の認知傾向、課題の性質が認知に及ぼす影響、あるいは方略の有効性についての知識をメタ認知的知識と呼ぶ、そして、認知プロセスや状態のモニタリング（監視 monitoring）、コントロール（制御 control）あるいは調整（regulation）を実際に行うことをメタ認知的活動あるいはメタ認知的経験などと呼ぶ」と定義している。

3) 市川伸一編『認知心理学 4 思考』p1

4) 前掲書 p158

(4) 書道の学習活動とメタ認知

三宮のまとめた概念⁵⁾をもとに、書道の学習活動で具体的に示すならば、次のようになろう。

<メタ認知的知識>

- ・ 人間（自分や他者、人間一般）の認知特性についての知識
「私は行書は得意だが、楷書は苦手だ」「Aさんは作品を上手くまとめるのが得意だが、Bさんは線質がきれい」「たくさん練習した作品は出来が良い」
- ・ 課題についての知識
「楷書は書き順を間違えると字形がくずれる」
- ・ 方略についての知識
「淡墨を使ってみよう」「一度濃く磨り、後で薄めた方が良い墨色になる」「淡墨を使うと幻想的な作品ができる」

<メタ認知的活動>

- ・ メタ認知的モニタリング
「この古典は私には難しそう」「この詩句なら○字を目立たせることで良い作品ができそう」
- ・ メタ認知的コントロール
「思ったより変化があってまとめにくい」「予想に反して清書まで時間がかかりそう」「スピード感が表現できていないのは墨色が悪かったからだ」

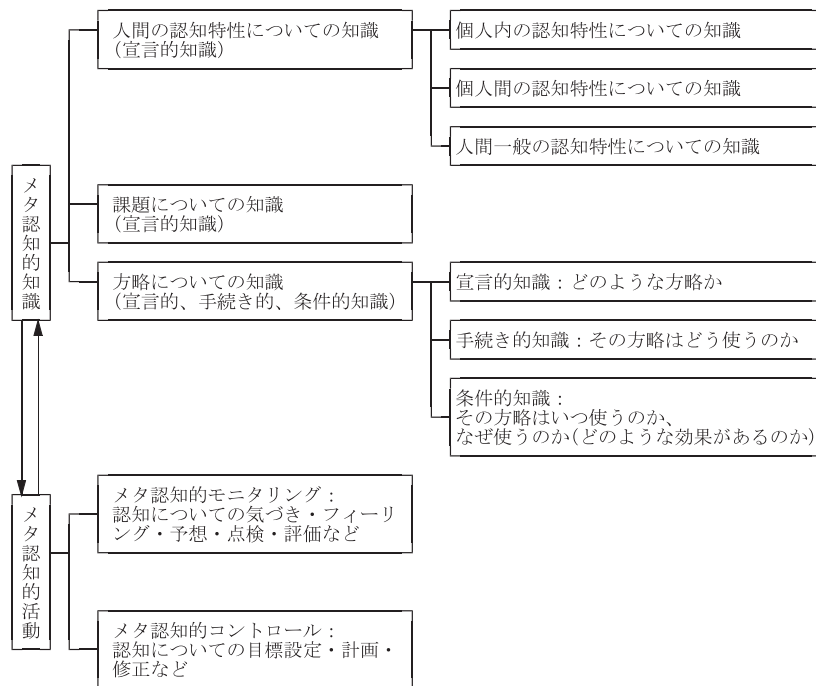


図2 メタ認知の分類 (三宮2008)

5) 三宮真智子編『メタ認知』p9

3. 書道の学習活動と思考・認知との関係

(1) 思考や認知活動はどう学習活動に関係していくのか

書道の学習活動における思考・認知の役割は、学習活動を活性化するとともに、学習内容の定着を確実にするものと予想される。「基本的活動過程」に含まれる「分析」「弁別」「予測」「把握」「解決」「焦点化」「反省」「適用」「発展」といった従来行われてきている活動を、より科学的な認識のもとに実践できる可能性がある。複雑多岐にわたる書道の諸活動の具体的な内容を、抽象化された認識へと帰納していくことで一定の学力の定着へと結びつけていけるものと考えられる。

- ア 鑑賞の基本的な活動過程（鑑賞方法の明確化）における認識
- イ 臨書の基本的な活動過程（書道技能の法則化）における認識
- ウ 創作の基本的な活動過程（表現意図の具現化）における認識

久米の「基本的活動過程」から、上記3つの認識にまとめられる。これらについて具体的な内容を整理してみたい。

(1)-① ア 鑑賞の基本的な活動過程（鑑賞方法の明確化）における認識

書作品は、抽象化された文字を構成する点画が、用具・用材、墨色、線質、全体構成等の諸要素によって表現されている。抽象化された書作品の表現を鑑賞するのは、他の芸術作品と比較して難易度の高い活動である。「誰が書いたのか」「何が書いてあるのか」「どのように書いてあるのか」が手がかりになるものの、学習者にとっては根気のいる活動になる。

書の鑑賞は、「直観的鑑賞」「分析的鑑賞」「総合的鑑賞」と3つの段階で考えられる。「直観的鑑賞」では、作品から受ける印象をあげる。稚拙な言葉でも良い。「分析的鑑賞」では、表現されている方法について、図1中段の諸要素によって分析していく。「総合的鑑賞」では筆者、内容とともに、「直観的鑑賞」「分析的鑑賞」をまとめる。

「鋭い感じがする」。なぜそう感じたのか。「起筆の角度が鋭角的に書かれている」「送筆部分の筆圧が軽い」「文字間がたっぷりとられている」これらをまとめ、「筆者は欧陽詢だ」「唐時代の作品の特徴は整っている」などにつながっていく。

(1)-② イ 臨書の基本的な活動過程（書道技能の法則化）における認識

すぐれた筆跡を見て習うのが臨書である。書の古典の特徴を瞬時に把握することは難しい。臨書は鑑賞活動と表裏一体のものであり、書かれた作品を追体験する臨書を突き詰めていくと、鑑賞の深まりへとつながっていく。

対象を把握することから臨書は始まる。表現原理、技法を一通り把握する。そして、①試書②問題点の検討と解決法の把握③練習④中間まとめとその検討⑤再練習⑥まとめ⑦発展の流れで学習は進む。例えば、対象の古典は、学習者自身にとって難易度はどうか。用筆のポイントはどこにありそうか、はっきりとした意図をもって試書に臨む。試書における課題の把握において、自らの文字を直視できるか。試書における問題点や解決方法の明確化。それが練習への意欲につながる。予測が的確だったか。中間まとめで古典のみならず、試書との比較を通して、さらに厳密に問題を検討する。再練習。まとめ。そして成果の確認。さらに他の文字への転移発展を図り、背臨や倣書へ。

一連の活動から、古典に含まれている技能の法則性へとまとめていくことが求められる。ま

とめられた法則は書道技能として学習者へ定着する。

(1)－③ ウ 創作の基本的な活動過程（表現意図の具現化）における認識

自らの発想や意図から表現方法を決定し表現するのが創作である。既成の作品の模倣になりがちになるのは、発想の手がかりがつかめなためである。名跡の鑑賞、臨書からの発展、素材となる詩句や言葉、用具・用材からの触発高揚、他の芸術や自然からの触発高揚、生活からの感動や触発高揚などが手がかりとなる。

意図や主題の焦点化とともに、素材の決定など表現基盤を確実にする。次に、表現方法の検討が求められる。草稿の作成の前に、規格の決定、用具・用材の選定、書体・書風の決定、全体構成の吟味などである。そして、実際に表現する。初書、推敲、再表現。清書、押印、表装。鑑賞とまとめの手順となる。

一連の活動では、発想段階からの表現意図の明確化が求められる。表現意図を具現化していくのが創作における学習活動となる。

(1)－④ 書道の学習（指導）における思考・認知活動の意義

指導者の手順通りに学習活動が進んだとしても、技能を含む学力の定着には至らない。学習過程の諸活動における、鑑賞方法の明確化、書道技能の法則化、表現意図の具現化は、思考・認知活動によって活性化され、明確化され、学力として定着する。そして、最終的には「書道の学力」の全体の認識へいたるまでの、認知面を充実させることにつながっていくものと考えられる。

(2) アイウにおける思考・認知活動の関わり

(2)－① 鑑賞の基本的な活動過程と思考・認知活動

(2)－①－a 「直観的鑑賞」における思考・認知活動

「直観的鑑賞」の場合、作品を見て抱いた印象は反射的な思考であるからあげやすい。ここでは、あげた印象を他者の印象と比較することによって、個人内での認知が成り立つ。「私のあげた印象はみんなと大体同じだ」「私の見方はみんなとは違う」など。モデル例をあげると次のようになろう。

「作品を見て受けた印象をあげてください。」（課題の把握）

↓

「（鋭い感じの作品だ）」「（ゆったりした感じがする）」

↓

「感じた印象を出し合ってみましょう」「受ける印象はいろいろありましたね」

↓

「みんなと大体同じだ」「私の見方はみんなとは違う」（個人間の認知特性の知識）

(2)－①－b 「分析的鑑賞」における思考・認知活動

「分析的鑑賞」の場合、ここでの情報は一気に増える。上掲の図1の中段の要素全てが情報であり、その情報の整理には図1が有用である。学習者はこれらの要素から作品の特異点をあげていく。例えば、長い点画が目立つだとか、起筆の角度や転折部分の用筆など。異なる作品を示して「比較」させることで、書きぶりの違いが明確になるかもしれない。モデル例をあげると次のようになろう。「九成宮醴泉銘」の場合。

「教科書体の「宮」字と比較して異なる書き方をあげてみましょう。」(課題の把握)

↓

「口と口の中のノがありません。」「一画目が下へ出ています。」「起筆が鋭角的に書かれています」…(視覚情報を基にした思考)

↓

「他の同じ「宮」字を見てみましょう。」(発展的視覚情報の収集)

↓

「同じように書かれています。」「失敗でなく意図して書かれているかも」(メタ認知的コントロール)

↓

「どんな法則に則って書かれていますか」(発展的課題の把握)

↓

「上下の関係の文字は中心がずれる」「右側に広い空間ができるように工夫されている」(メタ認知的知識: 課題についての知識)

ここでの認知活動では、具体的なものを抽象化することによって、その法則性がより明確化されていく。

具体的な事項	→	抽象化された法則
・点画同士の接し方		
・画間のとり方	→ 窮屈に見えないように工夫	「厳格な決まりに則って書かれている。」
・上下の関係		
・横画の方向	→ 右側へ広い空間を作り、構築的な工夫	

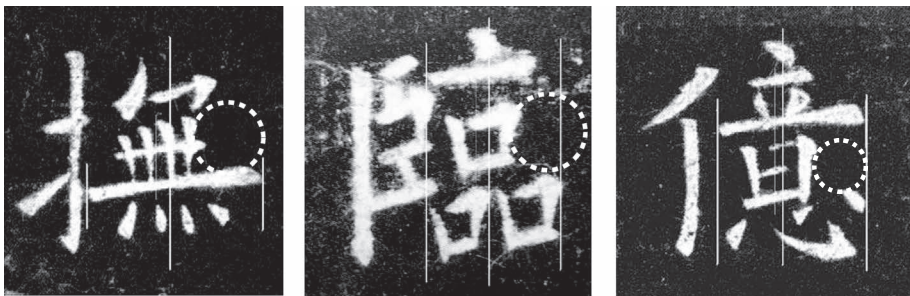


図3

(2)-①-c 「分析的鑑賞」における思考・認知活動
「総合的鑑賞」の場合、…… (未完)

4. 実践における今後の課題

22年度の「楷書法Ⅰ・Ⅱ」において、鑑賞で言えば「直観的鑑賞」「分析的鑑賞」。臨書で言えば「表現原理・技法の分析」（「分析的鑑賞」）にあたる学習活動において、思考・認知がどのように機能しているか実践した。

対 象 安田女子大学22年度入学生30名
 時 期 平成22年6月4日、平成23年1月12日
 内 容 九成宮醴泉銘および鄭義下碑における「直観的鑑賞」「分析的鑑賞」
 方 法 プリントへの記入

記入されたコメントを整理すると、次のような変容が見られた。

6月4日（九成宮醴泉銘）

- ・点画の長短や太細に関する記述。
- ・点画の記筆や転折部分の鋭さに関する記述。
 - ・上下の関係から成る文字について一定の法則に気づく（中心移動の原理）。
 - ・九成宮醴泉銘全体を貫く原理についてはほとんど記述できない。

1月12日（鄭義下碑）

- ・良さが理解できず苦しみつつ、「意味づけ」することで新しい発見が生まれる記述。
 - ・「バランスが悪い」わけではなく、これで「整っている」ことに気づく記述。
 - ・点画に囲まれる空間に細やかな工夫が隠されていることに気づき、鄭義下碑全体を貫く原理を説明する記述が増える。

注意しなければならないのは、ここに記入されているコメントが思考や認知に直接かかわっているのか、単なる「つぶやき」なのか判別の難しさ見える。銀林⁶⁾は、「できる」と「わかる」について、

- (A) やり方がわかる…手続きの習得（できる）
- (B) わけがわかる…意味・内容の理解（わかる）

と区別している。教師が「わかりましたか」問うのはBであるが、学習者は往々にしてAのことを「わかった」と認識するという。実践後の分析方法が課題である。

お わ り に

このように、書道の学習活動全体と思考活動との具体的な関係整理は途中の段階である。今後、各活動における試案を示すことで、曖昧なまま進められていた学習指導が明確になっていくことが期待できよう。モデルに沿って実践データを蓄積していくことも求められる。

書道における学習者研究の意義は、①授業研究にかかわる面、②学習者の芸術的生活にかかわる面、③学習者の発達全体にかかわる面、④視点相互の関係の四点にまとめられよう。特に教師主導、お手本絶対主義が払拭できない書道教育にあっては、自己学習力の育成が急務である。書

6) 佐伯 胖『理解とは何か』p42～43

写ではその書写技能と認知面との関係が明確になりつつある今、書道においても書写での成果を生かし学習者の内面へ切り込んでく研究が求められている。

参 考 文 献

- 久米 公『書写書道教育要説』萱原書房 1989
佐伯 胖『理解とは何か』認知科学選書4 東京大学出版会 1985
市川伸一編『認知心理学4 思考』東京大学出版会 1996
三宮真智子編『メタ認知』北大路書房 2008
松本仁志「書写の学習指導方法と認識活動の関係—比較を中心に」『書写書道教育研究第11号』全国大学書写書道教育学会 1997

[2011. 9. 29 受理]